

# 自由教育実践校と不登校のかかわりに関する研究 —私立A中学・高校の教員を対象として—

角 田 智恵美\*

(平成22年9月30日受付；平成22年10月26日受理)

## 要 旨

本研究では、自由教育の実践校であり、不登校問題が社会的に広く知られる以前から多くの不登校生徒を受け入れ、教育に当たってきた私立A中学・高校の教員の不登校生徒へのかかわりに焦点を当てた。自由教育が、不登校生徒及び多くの不登校生徒とかかわる教員自身にとってどのような意義や課題があるのかを明らかにすることを目的とした。

不登校生徒の成長や回復には、自由教育の理念や校風そのものが大きく寄与していることが示唆された。また、そこで教員と生徒、生徒同士の人間関係も生徒の回復、成長を促進していることが推測された。しかし、元来不登校生徒に特化した学校ではないため、学習支援・保障という点では限界が見られた。

他方、教員が不登校生徒へかかわることで、過重な負担感や時に無力感をも感じることがあるものの、人間、教育、学校等について深く省察する機会になっており、実践への意欲や希望につながっていることも示された。

## KEY WORDS

自由教育 alternative education 不登校 non-attendance at school 回復 recovery 成長 growth  
教員 teacher

## 1 問題と目的

不登校問題が重大な教育課題と捉えられて久しい。文部科学省は、2003年に発表した「今後の不登校への対応の在り方について（報告）」<sup>(1)</sup>の中で、不登校に対する基本的な考え方、学校における取組の在り方、学校と関係機関との連携の在り方など、幅広い提言をなしている。また、この報告を受けて作成された生徒指導資料「不登校への対応と学校の取組について」<sup>(2)</sup>には、不登校への効果的な対応に関してより具体的に示されている。同時に「不登校を生まない、児童生徒にとって魅力のある学校を実現する」ことが不可欠であることも言及されている。「魅力ある学校づくり」のためには、「心の居場所」、「絆づくり」の重要性を強調するとともに、「学ぶ喜び、活動の意欲を育てる学校」、「開かれた学校づくり」を重視している。

19世紀末期から、20世紀初期にかけ、子どもの関心や感動を中心に、より自由で生き生きとした教育体験の創造を目指そうとする「自由教育」運動が欧米で活発化した<sup>(3)(4)</sup>。日本でもこの流れを受け、いくつかの「自由教育」実践校が新設された<sup>(5)(6)(7)</sup>。その後一時衰退の時期を経るものの、第二次世界大戦後復活し、現在もこれらの流れをくむ学校で「自由教育」の精神に基づく実践が行われている。「教育学用語辞典」<sup>(8)</sup>によれば、「自由教育」実践校の一つであるA中学・高校について以下のように記されている。「人間の尊厳を基調として若者の可能性にはたらきかけ、異質で多様な能力を引き出し、心身にわたる成長を助け、自立した自由へのはっきりとした意志を育てることを教育の基本的な目標としている。自由で開かれた思考の展開と、内面の世界の発展を大切にする質の高い授業、心と体を解放する芸術的な創造活動、自然や社会や人間という他者の発見・共感・交流を促す体験的教育、そして自分自身を再発見し、形成していくことを助ける『観』の教育、などを礎とした教育を特徴としている。また、基本的にテストをおこなわない学校として知られている。それは、テストの点数や成績という一元的な尺度によって生徒の優劣を格づけ・選別する教育は、この学園がおこなう『すべての生徒が人間らしい人間として成長することを目指す教育』の妨げになると考えるためとされる。」不登校への対応については、教育支援センター（適応指導教室）やフリースクールに代表される民間施設を活用した取組等が示されることが多いが、先に挙げた「自由教育」実践校でも多くの不登校生への対応を行ってきている。

本研究では、「自由教育」の実践校で、不登校問題が社会的に広く知られる以前から多くの不登校生徒を受け入れ、教育にあたってきた私立A中学・高校の教員の不登校へのかかわりに焦点をあて、自由教育が、不登校生徒及び多くの不登校生徒とかかわる教員自身にとってどのような意義や課題があるのかを明らかにすることを目的とした。

\*臨床・健康教育学系

## 2 方 法

### 2. 1 A中学・高校の概要

A中学・高校（以下A校と記す）は、1985年に「点数序列主義に迎合しない新しい教育を目指して」設立された。開校当初は、中・高で1000人を超える生徒が在籍していたが、近年の在校生は700人程度である。学校は、首都圏にありながらも自然豊かな地域にある。在校生の内100名余りが同敷地内の寮で集団生活を送っている。教育の柱として以下のような点を挙げている。①深く学ぶ授業をつくりだすことによって子どもたちを新しい認識の世界へ案内し、真の知性を育てる。②芸術による教育を重視し、すぐれた表現をつくりだすことによって、豊かな感情と鋭敏な感受性を育てる。③「ものを作る」「植物を育てる」「実社会の仕事を体験する」ことによって人間同士の相互性を気づかせ、自我の発達を助けるとともに、自然との共生を意識させる。④教科の知識や技術を統合し、自らの世界観、人生観を形成する基礎となる総合学習を充実させる<sup>9)</sup>。

### 2. 2 対象者と手続き

A校に筆者が直接出向き職員朝会時に調査の依頼を行った。専任教員、非常勤講師75名に質問紙調査の配布、依頼が可能であり、43名から回答を得た（回収率57.3%）。対象者の属性を表1に示す。専任教員は全て30代以上であり、全員が5年以上の教職経験及びA校での勤務年数を有している。内、63.0%（17人）はA校での勤務年数が20年以上である。また、専任教員の77.8%（21人）が中学・高校両方の担任または副担任の経験者である。

表1 対象者の属性 N=43

		20代	30代	40代	50代	60歳以上	小計	合計(人)
専 任	男	0	4	7	7	0	18	27
	女	0	2	4	3	0	9	
非常勤	男	2	2	1	1	3	9	16
	女	2	0	1	3	1	7	
合計(人)		4	8	13	14	4	43	43

### 2. 3 調査内容

調査項目を以下に示す。①不登校生徒とのかかわりの有無、②不登校生徒の成長・回復にとってのA校の教育の評価、③不登校生徒にとって最も良いと考えられる教育内容とその理由、④不登校生徒にとって最も改善を要すると考えられる教育内容とその理由、⑤不登校生徒がA校で教育を受ける意味と課題、⑥A校の教員が不登校生徒とのかかわる意味と課題。

## 3 結 果

### 3. 1 不登校生徒とのかかわりの有無

A校においてこれまでに不登校生徒と話をする、一緒に作業をする等のかかわりがあったかどうかを尋ねたところ、90.7%（39人）がかかわりが「あった」と回答している。対象者の教職経験が一定程度あることにも関連はあろうが、A校に多くの不登校生徒（経験者を含む）が在籍していることがうかがえる。

### 3. 2 A校の教育の評価

#### 3. 2. 1 不登校生徒の成長・回復にとってのA校の評価

A校のホームページやその他の資料、出版物等を参考に筆者がA校の教育の特徴を12項目設定し、各項目について不登校生徒の成長や回復にとって「良い」（4点）、「少し良い」（3点）、「少し改善を要する」（2点）、「改善を要する」（1点）の4件法により、評価してもらった。設定した12の項目と4点及び3点の「良い」群、2点及び1点の「要改善」群の割合等を表2に示した。一部無回答が多くみられた項目もあったが、いずれの項目においても半数以上の者が「良い」と答えており、概ね7～8割の者が各項目に対して「良い」という評価をしている。平均点は、「教育理念や校風」（3.7点）、「ゆるやかな校則やきまり」（3.5点）、「教師や生徒同士の人間関係」（3.5点）の順に高かった。

表2 A校の教育に対する評価 ( ) 内は%

N=43

評価項目	良い	要改善	無回答	平均点
① 授業	30 (69.8)	8 (18.6)	5 (11.6)	3.0
② クラスの雰囲気や活動	32 (74.4)	6 (14.0)	5 (11.6)	3.3
③ 学校行事	30 (69.8)	9 (20.9)	4 (9.3)	3.1
④ 休み時間や放課後	28 (65.1)	7 (16.3)	8 (18.6)	3.0
⑤ クラブやサークル, 有志の活動など	24 (55.8)	7 (16.3)	12 (27.9)	3.0
⑥ ゆるやかな校則やきまり	34 (79.1)	5 (11.6)	4 (9.3)	3.5
⑦ 教師や生徒同士の人間関係	35 (81.4)	5 (11.6)	3 (7.0)	3.5
⑧ 教育理念や校風 (自由と自立, 自由な雰囲気, 自由教育, 反管理教育, 脱偏差値など)	39 (90.7)	2 (4.7)	2 (4.7)	3.7
⑨ 制度 (中高一貫, 少人数学級, 入試制度, 卒業審査・認定など)	32 (74.4)	7 (16.3)	4 (9.3)	3.2
⑩ 環境 (寮生活, 自然環境, 食環境など)	31 (72.1)	7 (16.3)	5 (11.6)	3.2
⑪ 表現活動 (芸術の教育, 合唱, 太鼓や踊りなど)	37 (86.0)	4 (9.3)	2 (4.7)	3.3
⑫ 体験学習 (農業体験, 福祉・保育体験, 登山, 修学旅行など)	35 (81.4)	5 (11.6)	3 (7.0)	3.3
全 体	387 (75.0)	72 (14.0)	57 (11.0)	3.3

\*平均点は無回答を除く

### 3. 2. 2 最も良い教育内容とその理由

不登校生徒の成長や回復にとって「最も良い」と考えられるA校の特徴について, 先の12項目より選択してもらい, 41件 (40人) の回答を得た。選択数は, 「教育理念や校風」(16件), 「教師や生徒同士の人間関係」(10件), 「クラスの雰囲気や活動」(4件), 「体験学習」(3件) の順に高かった。

最も評価の高かった「教育理念や校風」を選択した理由について16件の記述があり, 意味ごとに分類・整理すると, 【反点数序列・反管理主義】(4件), 【個を尊重する文化】(4件), 【A校の教育の土台】(3件), 【自由・受容的雰囲気】(2件), 【気づきの促し】(2件), 【親の受容】(1件) のカテゴリーが抽出された。6つのカテゴリーとその代表的な記述を表3に示す。

次いで評価が高かった「教師や生徒同士の人間関係」を選択した理由についての記述を, 意味ごとに分類・整理すると, 【生徒同士のゆるやかな関係】(5件), 【教師との適度な距離感】(4件), 【気にかけてすぎない】(1件) のカテ

表3 「教育理念や校風」を最も良いとする理由

N=16

カテゴリー	代表的記述
反点数序列・反管理主義 (4件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校の原因が学校にある場合, 点数・競争ストレスや校則等による圧迫感があると考えられるので</li> <li>・学校での競争・強制が不登校問題に拍車をかけていると思う</li> </ul>
個を尊重する文化 (4件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校全体に個々の立場を尊重しようという空気があることで, 全体に合わせることを強制され傷ついた生徒が救われると思う</li> <li>・個々の生徒に対して一律に何かをあてはめることがなく, 個として尊重する文化がある</li> </ul>
A校の教育の土台 (3件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校が設立された土台ともいえるので</li> <li>・教員の対応が非常に大きな役割を果たしていると考えるが, その教員の考え方やものの捉え方が形成させていく上で教育理念・校風が重要な役割を果たしている</li> </ul>
自由・受容的雰囲気 (2件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受容的で生徒に寄り添う理念・校風が徹底しており, その中で回復し, 自分を取り戻した子どもを多く見てきた</li> <li>・自由な校風で, いつでもクラスに入れる雰囲気がある</li> </ul>
気づきの促し (2件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数字や一般的な価値観によって評価されるのではなく, 自分自身が本当にどうしたいのか, 自分に問いかける時間や考える時間がある</li> <li>・人間や物事に対する多様な価値観の存在に気づくことで, 不登校生本人が自らを解放し本来の力を発揮していく姿を見てきた</li> </ul>
親の受容 (1件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親が不登校に対してゆとりを持って受け入れていける気持ちを持てる</li> </ul>

ゴリーが抽出された。3つのカテゴリーとその代表的な記述を表4に示す。

表4 「教師や生徒同士の人間関係」を最も良いとする理由

N=10

カテゴリー	代表的記述
生徒同士のゆるやかな関係 (5件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・厳しい上下関係もなく、存在を認める</li> <li>・相手の立場に立った人間関係がかなりつくられている</li> <li>・多くの不登校は、公立学校でのいじめから起因しているように思えるが、人間関係がゆったりしているので、いじめは少ない</li> <li>・不登校生がいつでも戻って来られる場として、人間関係がこわれずに存在している</li> </ul>
教師との適度な距離感 (4件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時には見守り、時には声かけ、誘ってみるという適度な距離感</li> <li>・生徒とゆっくり面談できる環境、時間が保障されており、状況にあった対応がかなり広範囲にできる</li> <li>・生徒のニーズに応えられる関係と環境がある</li> </ul>
気にかけすぎない (1件)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周りが不登校であることに対して気にかけすぎないことが生徒にとって楽なのではないか</li> </ul>

### 3. 2. 3 最も改善を要する教育内容とその理由

12項目中、「最も改善を要する」と考えられる項目について、36件(36人)の回答を得た。選択数は、「授業」(9件)、「制度」(7件)、「クラスの雰囲気や活動」(5件)の順に高かった。

「授業」を「最も改善を要する」とした理由については、「通信制のような不登校生徒への特別な受講システムがないこと」、「評価制度の問題」、「A校での本来のねらいに沿った授業展開の限界」、「不登校生徒へ多くの特別課題を出すことへの批判」、「授業に参加できないことを許容しすぎることへの危惧」、「不登校か否かに限らず共通して実質的に何を獲得することが学ぶことになるのか認識が共有されていない」、「平均的な気質に合わない生徒への対応が必要」等、多種多様な内容が述べられていた。

「制度」を選択した理由としては、元来、不登校生徒に特化した学校ではなく、「通信制の学校のような専門の制度もなく」、「各担任の負担が過重になりがち」であることが挙げられていた。授業の持ち方、家庭学習用の教材、対応の人員等、不登校生徒への特別な制度やサポート体制の必要性について記述されていた。

「クラスの雰囲気や活動」は、「最も良い」とした者が4人いた反面、「最も改善を要する」とした者は5人であった。「最も改善を要する」とした理由として、「突然再登校した生徒をサポートする生徒がいない」、「時に転入生やまじめな生徒へ冷たい視線が存在することがある」、「クラスの友人とのトラブルで傷つきがある場合は、再登校が難しい」等が挙げられていた。

### 3. 3 不登校生徒・教員にとっての意味

#### 3. 3. 1 不登校生徒にとっての意義・課題

不登校生徒が、A校で教育を受けることについてどのように考えられるか問うたところ、89件の記述を得た。分類の結果、抽出された3つのカテゴリーは【意義】、【課題】、【その他】であった。

以下、カテゴリー別に記述していく。

【意義】のカテゴリーでは、〈回復・成長の現実〉(8件)、〈他者とのかわり〉(8件)、〈休養・心のケア〉(6件)、〈心機一転の機会〉(5件)、〈自由・非競争・反管理〉(5件)、〈柔軟な学校システム・配慮〉(5件)、〈安心感・受容的雰囲気〉(4件)、〈社会的ニーズ〉(3件)、〈学ぶことを可能にする〉(3件)、〈ゆとり〉(2件)、〈所属感〉(2件)、〈特別視しない〉(2件)、〈その他〉(3件)の13のサブカテゴリー、56件の記述が分類された。件数の多かったサブカテゴリーの具体的な記述の内、代表的なものを表5に示した。〈回復・成長の現実〉では、「多くの生徒が実際に学校で元気に活動できるようになっている」こと、〈他者とのかわり〉では、「いつでも戻りやすく、人間関係もこわれていない」こと、〈休養・心のケア〉では、「エネルギーを養うことができる」、「傷ついてしまった心を癒す時間と空間がある」等が挙げられていた。〈心機一転の機会〉では、「新しい生活の場のスタートとなる」、「学校環境が大きく変わり、大きな変化がある」等が挙げられ、〈自由・非競争・反管理〉では、「競争・管理主義ではない学びと交わりの場」、「生徒の自律性が大切にされ、のびやかに生活する」等が、〈柔軟な学校システム・配慮〉では、「規則よりもまず生徒の状況を見て対応という姿勢」、「一人ひとりにあっ

表5 不登校生徒にとっての意義・課題（一部抜粋）

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的記述
意義	回復・成長の現実	・多くの生徒が実際に学校で元気に活動できるようになっている
	他者とのかかわり	・時々休んだり，長期休んでいても，いつでも戻りやすく，人間関係もこわれていない
	休養・心のケア	・エネルギーを養うことができる ・傷ついてしまった心を癒す時間と空間がある
	心機一転の機会	・新しい生活の場のスタートとなる ・学校環境が大きく変わり，大きな変化がある
	自由・非競争・反管理	・競争・管理主義ではない学びと交わりの場 ・生徒の自律性が大切にされ，のびやかに生活する
	柔軟な学校システム・配慮	・規則よりもまず生徒の状況を見て対応という姿勢 ・一人ひとりにあった対応をきめ細かく実践
課題	学習支援・保障	・学習保障が十分とは言えない ・通信制のような体制を考える必要もある
	心理・社会的支援	・必要な個別対応が十分にできていない ・不登校生徒のためのサポート体制があってもよい
	本来の目的との齟齬	・本校の教育を身につけられていないのではないかと ・日々の授業での学び，出席を大切にしている

た対応をきめ細かく実践」等が挙げられていた。

【課題】のカテゴリーでは，〈学習支援・保障〉（12件），〈心理・社会的支援〉（6件），〈本来の目的との齟齬〉（5件），〈過剰な人数〉（3件）の4つのサブカテゴリー，26件の記述が分類された。件数の多いサブカテゴリーの代表的な具体的記述を表5に示した。〈学習支援・保障〉では，「学習保障が十分とは言えない」，「通信制のような体制を考える必要もある」等が挙げられ，〈心理・社会的支援〉では，「必要な個別対応が十分にできていない」，「不登校生徒のためのサポート体制があってもよい」等が，〈本来の目的との齟齬〉では，「本校の教育を身につけられていないのではないかと」，「日々の授業での学び，出席を大切にしている」等が挙げられていた。

【その他】のカテゴリーでは，〈不登校の多様性〉（2件），〈特別ではない〉（2件），〈その他〉（3件）の3つのサブカテゴリー，7件の記述が分類された。

以上のような結果から，多くの不登校生徒が自由で競争のない自由教育の中で，他者とのかかわりを通じ，休養，心のケアの機会を得，回復や成長が図られていることが明らかとなった。A校の教員に不登校生徒への自由教育の意義，有効性が認識されていることが読み取れる。一方で，元来不登校生徒に特化した学校ではないが不登校生徒の数が相当数あり，心理社会的支援もさることながら，特に学習面での支援・保障の課題が大きいことが明らかになった。

### 3. 3. 2 教員にとっての意義・課題

A校の教員として不登校生徒とかかわることは，どのような意味があると考えられるか問うたところ，68件の記述を得た。回答を分類，整理すると表6のようになった。分類の結果，抽出されたカテゴリーは【理解】，【振り返り】，【喜び・希望】，【課題】，【スキルアップ】，【価値観】，【特別視していない】，【その他】の8つであった。

以下，件数の多かったカテゴリーについて記述していく。

【理解】のカテゴリーでは，〈人間理解〉（7件），〈不登校についての理解〉（5件），〈子どもをとりまく状況の理解〉（4件）の3つのサブカテゴリー，16件の記述が分類された。代表的な記述としては，〈人間理解〉では，「人間の不完全さ，個別性，多様性を知る」，「人は変わるのだということを思い知る」，「人は人の中で育つということを考えさせられる」等が挙げられ，〈不登校についての理解〉では，「不登校の原因をよく理解すること」，「考えていること，世界観などを知る機会になる」等，〈子どもをとりまく状況の理解〉では，「現代を生きる生徒，若者の生きづらさを知る」，「教育をとりまく複雑な社会状況をよりよく知れた」等が挙げられた。

【振り返り】のカテゴリーでは，〈学校・教育について考える機会〉（7件），〈自己省察の機会〉（5件）の2



表6 教員にとっての意味

N=68

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的記述
理解 (16)	人間理解 (7)	・人間の不完全さ、個性、多様性を知る ・人は変わるのだということを思い知る ・人は人の中で育つということを考えさせられる
	不登校についての理解 (5)	・不登校の原因をよく理解すること ・考えていること、世界観などを知る機会になる
	子どもをとりまく状況の理解 (4)	・現代を生きる生徒、若者の生きづらさを知る ・教育をとりまく複雑な社会状況をよりよく知れた
振り返り (12)	学校・教育について考える機会 (7)	・学校や教育の在り方を考えるよいきっかけになる ・学校現場の問題点を知り、自分にできることを考える機会
	自己省察の機会 (5)	・自分自身の生き方を問い直すきっかけになる ・自分自身の変化や成長が感じ取られる
喜び・希望 (11)	教師の仕事への意義・意欲・希望 (6)	・自分が試され、力をつけねばと思うことが意欲となっている ・変わっていく生徒の存在は自分にとっての「希望」
	生徒の成長・変化に対する喜び (5)	・劇的に生徒が変化したという感動的な体験もした ・様々な成長の形と出逢え、関われることに喜びを感じる
課題 (7)	困難感・無力感 (4)	・時に自らや学校全体が能力の限界を超えるような事態に直面 ・力不足を感じ、自身が心的にダメージを負っていると感じる
	更なる対応・研究の必要性 (3)	・背景に発達障害等があるケース等フォロー、研究が必要 ・学校として実践研究することが望まれる
スキルアップ (6)	対応力の習得・向上 (6)	・判断や実践の積み重ねが他の生徒の対応時にも力になっている ・教師のコミュニケーション能力を培う上でとても勉強になる
価値観 (5)	価値観の変容 (5)	・自らの価値観やものの考え方を揺さぶることができる ・自分自身の学校観の捉え直しになる
特別視していない (5)	特別視していない (5)	・一人の生徒として付き合い、不登校だからと特別には考えていない
その他 (6)	その他 (6)	

つのサブカテゴリー、12件の記述が分類された。代表的な記述としては、〈学校・教育について考える機会〉では、「学校や教育の在り方を考えるよいきっかけになる」、「学校現場の問題点を知り、自分にできることを考える機会」等が挙げられ、〈自己省察の機会〉では、「自分自身の生き方を問い直すきっかけになる」、「自分自身の変化や成長が感じ取られる」等が挙げられた。

【喜び・希望】のカテゴリーでは、〈教師の仕事への意義・意欲・希望〉（6件）、〈生徒の成長・変化に対する喜び〉（5件）の2つのサブカテゴリー、11件の記述が分類された。代表的な記述としては、〈教師の仕事への意義・意欲・希望〉では、「自分が試され、力をつけねばと思うことが意欲となっている」、「変わっていく生徒の存在は自分にとっての『希望』」等が挙げられた。〈生徒の成長・変化に対する喜び〉では、「劇的に生徒が変化したという感動的な体験もした」、「様々な成長の形と出逢え、かかわれることに喜びを感じる」等が挙げられた。

【課題】のカテゴリーでは、〈困難感・無力感〉（4件）、〈更なる対応・研究の必要性〉（3件）の2つのサブカテゴリー、7件の記述が分類された。〈困難感・無力感〉では、「時に自らや学校全体が能力の限界を超えるような事態に直面」、「力不足を感じ、自身が心的にダメージを負っていると感じる」等が挙げられ、〈更なる対応・研究の必要性〉では、「背景に発達障害等があるケース等フォロー、研究が必要」、「学校として実践研究することが望まれる」等が挙げられた。

以上のような結果から、教員は不登校生徒とのかかわりを通じて、不登校やそれを取りまく状況の理解に留まらず、更なる人間理解を深めていることが分かる。また、かかわり、様々な事柄に理解を深める中で、教育、学校、自分自身への省察を行なっていることが推測された。実際にきめ細かなかかわりを持ち、変化や回復を目の当たりにすることで、教員としての喜びや希望を得ていることが読み取れる。一方で、必ずしも回復や成長がはっきりと見えることばかりではなく、困難感や無力感も感じている。

## 4 考 察

### 4. 1 自由教育の意義・有効性

本稿では、自由教育実践校の一つと考えられるA校を対象としているが、まずここで規定する自由教育について整理しておきたい。一般に自由教育が実践される場合は、「フリースクール」、「自由学校」、「オルタナティブスクール」等と呼ばれている<sup>(10)</sup>。しかし、これらの場合は実態が様々であり、定義についても必ずしも一様ではない<sup>(11)(12)(13)</sup>。ここでは、これらの内、日本の学校教育法第一条に規定されている学校での自由教育に限定したい。

自由教育実践校には次のような共通の特徴があるとされている。「①種としてヒトの子が持っている好奇心、知的欲求、行動意欲を全面信頼する。②大人の側の一切の強制、押しつけを排し、子どもの自由を完全保障する。③何をするか、何を学ぶか、誰から学ぶかは子どもの選択が優先する。④教育の中心は、自然との関係、人間関係を含めて、子どもたちの生活体験を豊富にすることに置く。⑤子ども同士の競争を促す大人からの評価をしない。⑥教師と子どもとの関係は、人格的に対等・平等である。⑦教室、クラス別を排し、すべてオープンである。⑧教師は、専属の教師だけでなく、広く地域の職業人を臨時講師として招いたり、出かけて行って学ぶ。⑨自分が自由であるためには、相手の自由を尊重しなければ自由でありえないという、高次元のモラルを身につける」<sup>(14)</sup>。つまり、自由教育とは、教育の場から管理的、強制的、競争の要素を排し、子どもの自発性や意思決定を最大限に尊重する教育といえよう。A校は、法に規定された学校であるため、②、③、⑦に一定の限界はあるが、概ね先に挙げた特徴を含んでいる。

本研究の結果から、自由教育の様々な側面が不登校生徒の回復や成長に有効であると捉えられるが、特に、自由教育実践上の土台となっている教育理念や校風に起因するところは大きい。これまで不登校への対応としては、スクールカウンセラーの活用等を含めた教育相談体制の工夫や教員のカウンセリング能力の向上を図る取り組み、教育支援センター（適応指導教室）の設置等、従来の学校の在り方を変えずに行われる場合、または学校外の民間施設での取組が行われてきており、両者とも、一定の効果を上げてきてはいる。しかし、不登校という現象は、学校に対する問題提起であり、日本の学校制度、学校の在り方に示唆を与えうると捉えると、単に学校への適応あるいは学校外での教育ではなく、学校という規定の中で実際に独自の自由教育が行われ、不登校生徒の回復、成長を図っていることの意義は大きい。自由教育が不登校生徒の回復、成長に寄与するだけでなく、学校の在り方をも再考する視点を与えうるものと考えられる。

また、筆者は、先に不登校経験のあるA校の卒業生に対するインタビュー調査を行い、自らの回復や成長にどのような側面が有効であったか評価してもらった<sup>(15)</sup>。生徒の側からも教育理念や校風についての評価は高い傾向にあったが、具体的な教育内容・方法としての表現活動や体験学習に対して、より高く評価していた。生徒は3～6年間A校で過ごし、ここでの教育を体験する。一方、教員にはA校の開設間もない頃より長期に渡ってA校の教育に携わって来た者も多く含んでいる。従って、A校が設立された経緯や日本の学校教育の中での位置等、より広範囲、社会的な視点で有効性を評価しているものと推測される。また、独自の教育を実践しているというA校の教育への気概、自信の表れとも受け取れる。

### 4. 2 回復・成長の鍵としての人間関係

不登校となったきっかけや理由は様々であり、簡単に表現することは困難な場合が多いが、一般に学校生活（友人関係をめぐる問題、教師との関係をめぐる問題、学業の不振、クラブ活動・部活動への不適応、学校の決まり等をめぐる問題、入学・転編入学・進学時の不適応）に起因するものは少なくない。なかでも、友人関係をめぐる問題の割合は高くなっている<sup>(16)(17)</sup>。また、近年子どもたちの対人関係能力の不足が指摘されることが多く、不登校生徒については特にその傾向が強い。谷井らが行った調査<sup>(18)</sup>によれば、教育支援センター（適応指導教室）の運営方針として重視されているのは、「自主性・自立性を育てる」「自己の自信を回復させる」に次いで、「対人関係の能力を伸ばす」ことであった。逆に言えばこれらの点が不登校の子どもたちに最も不足していると認識されているということであろう。

A校の教育の有効性は、自由教育の理念そのものに起因しているが、成果はそこでの対人関係の在り様に集約されているともいえる。生徒同士テストによる競争がなく、一定の限界はありつつも教師と生徒が人格的に対等、平等な立場に立つ場では、いじめ等も少なく、自ずとゆるやかな対人関係、多様な生徒のあり様を相互に受容し合える関係が育まれるものと考えられる。

近年、対人関係能力を高めるソーシャルスキル教育の取り組みが進んできている<sup>(19)(20)(21)</sup>。筆者も担任等だけでなく、不登校生徒等とかかわる機会の多い養護教諭がソーシャルスキルトレーニング等実践できるようになることを推

奨めている<sup>(22)</sup>。これら具体的に対人関係能力を高める取組も重要ではある。しかし、一方で硬直した人間関係に陥りやすい「学校」の在り方そのものを変えることで、自ずと育まれていく対人関係能力もあるのではなかろうか。

#### 4. 3 自由教育実践上の課題

現在は、「不登校の子どものための学校」も通信制高校等をはじめ数多く設置されてきている。一方、自由教育実践校では、元々「不登校の子どものための学校」ではないが、不登校がまだ社会的問題として注目される以前より、他の生徒と同様に不登校の生徒も受け入れてきた。その結果、現在全体に占める不登校生徒の割合は相当数に上っている。本調査のなかでも多くの不登校生徒が存校しているにもかかわらず、きめ細かな配慮はあったとしても不登校生徒専用の制度等がなく学習保障が不十分であるという指摘が多かった。現にある全日制に加え、通信制の学校も併設するという方法も考えられるが、そのためには時間や様々な調整が必要であろう。また、A校では単に生徒が課題を作成し教員が評価するという一対一の学びよりは、授業という生の集団の中での対話による学びを重視している。従って、通信制をとる場合、本来A校で目指している学びの姿の方向性が変わってしまうというダブルバインドに陥ってしまう。学習保障の問題は、当然のことながら学校の役割上重要である。しかし、大きな改革には様々な困難が予想され、当面は自主学習用の質の高い教材の開発、学習支援ボランティア等現教員に加えて学習支援にかかわる人員を得られるような制度を設けて行くこと等が現実的であろう。

#### 4. 4 教員が不登校生徒とかかわる意味

一般に、不登校問題は生徒指導上の課題であり、本人や家族はもちろん対応する教員が苦慮することが強調される。確かに本調査でも教員が不登校生徒へ対応するに当たり、困難感を抱いたり、無力感に陥る場合もあることが示された。しかし一方、大部分の記述で不登校生徒とかかわることへの肯定的な意味付けがなされていた。特に不登校問題を中心として、深い人間理解に到達したり、社会状況への理解が深まるなど教員自身の内面が豊かになるような状況が生まれている。このような人間、子ども理解の機会を得ることは、特に経験の浅い教員にとっては貴重であろう。筆者は、養護教諭を目指す学生を教育支援センター（適応指導教室）へボランティアとして派遣する事業に関与したことがあるが、学生にとっての一番の収穫は、子どもへの関心、理解の深まりであった<sup>(23) (24)</sup>。先に提案した学習支援ボランティアのような形で、教職を目指す学生が実際に不登校の子どもたちとかかわる機会を様々な場で取り入れていくことは、かかわる教員（目指す者）にとって自身のキャリア発達を促進するものと考えられる。

また、不登校生徒とかかわることにより学校、教育、自己を振り返り省察する機会を得ていることは、重要である。教員は、経験を積むごとにその対応力を向上させていくものと思われるが、逆に「慣れ」によって自身の実践についての省察を怠ることも考えられる。不登校生徒にかかわることで省察せざるを得ない状況に置かれることは、時に痛みも伴うことであろうが、長期的に見れば教員としての成長、人格の豊かさに結びついて行くであろう。更に、かわりが教員としての喜びとして実感され、希望を持って実践を進める原動力になっていることは注目に値する。

### 5 まとめと今後の課題

自由教育は、不登校生徒の回復、成長を促進するとともに、そこで不登校生徒とかかわる教員へも肯定的な作用を与えていることが明らかとなった。今後は教員のかかわりの実際を更に細かく調査、分析していくとともに、課題として浮き彫りになってきた学習保障について具体的に提案、関与して行きたい。

#### 謝 辞

大変お忙しい中、本調査にご協力いただいたA中学・高校の先生方に心よりお礼申し上げます。

#### 引用・参考文献

- (1) 文部科学省：「今後の不登校への対応の在り方について（報告）」 2003
- (2) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター：「生徒指導資料第2集不登校への対応と学校の取組について一小学校・中



学校編一」ぎょうせい 2004

- (3) 岩内亮一, 本吉修二, 明石要一編: 「教育学用語辞典 [第四版]」学文社 2006 p.138
- (4) 今野喜清, 新井邦男, 児島邦宏編: 「新版学校教育辞典」教育出版 2003 p.381, pp.428-429
- (5) 高山直通: 「自由教育の研究」明治圖書 1921
- (6) 堀末武一: 「大正自由教育主義の研究—千葉命吉を中心に—」理想社 1987
- (7) 中野 光: 「教育名著選集 大正自由教育の研究」黎明書房 1998
- (8) 前掲書 (3) pp.124-125
- (9) A校学校総合案内
- (10) 永田佳之: 「自由教育をとらえ直す」世織書房 1996 pp.2-3
- (11) 前掲書 (4) p.619
- (12) NPO法人東京シュレ: 「フリースクールとは何か」教育史料出版会 2000 p.14-25
- (13) オルタナティブ研究会: 「オルタナティブな学び舎の教育に関する実態調査報告書」国立教育政策研究所 2003
- (14) 前掲書 (7) p.4
- (15) 角田智恵美, 入谷好樹: 「不登校経験者からみた不登校問題と学校の在り方—私立A中学・高校の卒業生を対象として」『生徒指導学研究』第5号 学事出版 2006 pp.61-70
- (16) 前掲書 (2) pp.8-13
- (17) 伊藤美奈子: 「不登校その心もようと支援の実際」金子書房 2009 pp.15-19
- (18) 谷井純一, 沢崎達夫: 「適応指導教室における体験的活動が不登校児童生徒の回復過程に果たす役割に関する研究」独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター 2002 pp.10-11
- (19) 小林正幸, 相川 充編: 「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」図書文化 1999
- (20) 佐藤正二, 相川 充編: 「実践! ソーシャルスキル教育小学校」図書文化 2005
- (21) 相川 充, 佐藤正二編: 「実践! ソーシャルスキル教育中学校」図書文化 2006
- (22) 角田智恵美, 佐藤ひかり, 五十嵐裕子: 「不登校児童生徒への養護教諭の関わり方—現職養護教諭を対象とした質問紙調査を中心として—」『鳴門生徒指導研究』第16号 2006 pp.16-28
- (23) 角田智恵美: 「シンポジウム 養護教諭の養成教育における教育方法の充実をはかる工夫と実践 4 ヘルスカウンセリング能力の育成を目指して—学習支援ボランティア活動への参画—」『全国私立大学・短期大学(部) 養護教諭養成課程研究会誌』全国私立大学・短期大学(部) 養護教諭養成課程研究会 2008 pp.41-43
- (24) 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科: 「組織的な大学院教育改革推進プログラム『大学教育実践学研究者・指導者の育成』取組報告書」 2010 pp.59-62

# The relationship between alternative Education and Non-attendance at School

## Focusing on “A” junior and Senior High School

Chiemi TSUNODA\*

### ABSTRACT

This research explores the relationship between teachers and non-attendance at school at a private “A” junior and senior high school. The school’s alternative approach to education places importance on teachers’ involvement with students. The school began accepting and educating those students well before non-attendance became a social issue. It aims to clarify what significance and problems teachers and those students find in the course of developing the mutual relationship in alternative education.

The research results suggest that the school’s philosophy of alternative education and school spirit contributes greatly to the recovery and subsequent growth of non-attendance at school. Furthermore, the findings support the school’s abiding principle—that personal relationships between teachers and students, as well as those between students and students, enhance students’ recovery and growth. However, this school shows a certain limit in the support and security of learning because it basically does not specialize in the education for non-attendance at school.

On the other hand, the relationship with non-attendance at school gives teachers the opportunity to reflect deeply on humankind, education, and schooling. It also strengthens their desire to practice alternative education, despite their sense of being overloaded and helpless.

---

\* Clinical Psychology, Health Care and Special Support Education